

# TCFD提言に基づく情報開示 -リスクと機会の認識と対応-

## 取り組みの背景・考え方

地球規模の気候変動への対応は「持続可能な開発目標(SDGs)」の一つに位置づけられ、2016年11月発効のパリ協定以降、世界中で取り組みが進んでいます。日本においても、2020年10月に2050年カーボンニュートラルが宣言され、気候変動への対応が一層重要となっています。

エネルギービジネスを中心に事業を展開するDaigasグループにとって、気候変動対応は経営の重要課題の一つであり、CO<sub>2</sub>排出削減の取り組みは極めて重要な使命です。2021年1月には、当社グループとして「カーボンニュートラルビジョン」の策定・公表を行い、2050年に向けカーボンニュートラルに挑戦する姿勢を示しました。また、同年3月に「中期経営計画2023」を発表しました。

2023年3月には、「エネルギー・トランジション2030(ET2030)」を公表し、エネルギーの低・脱炭素化への移行に向けた道筋の全体像と、2030年にに向けた当社グループの具体的な取り組みやお客さまにご提供できるソリューションをとりまとめ、ステークホルダーの皆さまにご提示しました。

2017年6月に発表された「気候関連財務情報開示タスクフォース(TCFD)」による提言(以下、TCFD提言)は、投資家に適切な投資判断を促すために、企業に対して気候関連の財務情報開示を奨励しています。大阪ガスはTCFD提言に賛同するとともに、TCFD提言を気候変動への対応を検証する指標として活用しています。また、当社はTCFD提言に即した気候変動対応の情報開示に向けた取り組みを議論するTCFDコンソーシアム<sup>\*</sup>に参加しています。

<sup>\*</sup>TCFDコンソーシアム:2019年5月27日に設立され、気候変動対応の企業の効果的な情報開示や、開示された情報を金融機関等の適切な投資判断につなげるための方針などが民間主導で議論されています。経済産業省、金融庁、環境省がオブザーバーとして参加しています

## 気候変動に関するガバナンス

Daigasグループでは、気候変動対応を経営の最重要課題の一つであると認識しています。当社グループ全体の重要事業活動を意思決定、監督する取締役会において、気候変動問題を含む案件について意思決定、監督しています。年3回開催する「ESG推進会議(経営会議)」では、役員が気候変動問題を含むESG課題に関する活動計画および活動報告を審議し、代表取締役社長に上申、報告を行います。

また、当社グループのサステナビリティ活動を統括する役員「ESG推進統括」(代表取締役副社長)を委員長とし、関連組織長等を委員とする「ESG推進委員会」を設置しています。「ESG推進委員会」は年4回開催し、気候変動対応にかかわる事業活動の計画の策定・推進、目標達成状況、リスクの管理と対応等について組織横断的に審議・調整・監督し、そのうち、サステナビリティに関するESG経営の施策目標に対する進捗状況や、気候変動による財務影響が大きいと想定される事業計画などの重要事項を取締役に付議・報告しています。

社外取締役以外の取締役には、業績連動報酬を支給しており、その業績指標の一つとしてESG指標達成度係数を用いています。ESG指標には、カーボンニュートラルに向けたCO<sub>2</sub>排出量などの気候変動関連指標を採用しています。

## 戦略

### シナリオ分析

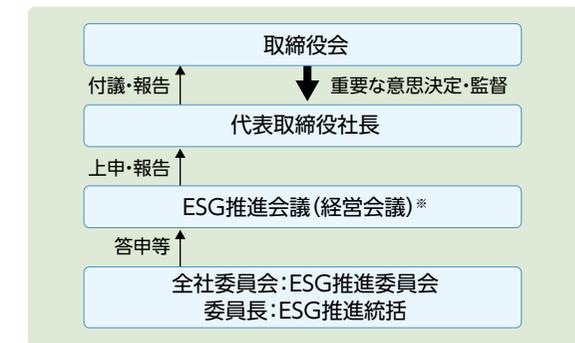
Daigasグループは、気候変動が中長期的に当社グループの事業に及ぼす影響を把握し、対応策を検討・準備するための材料として活用することを目的として、外部機関(IEA)が公表しているシナリオを用い、気候変動に関するシナリオ分析に取り組みました。

当社グループの事業のうち、気候変動による影響が大きいと想定されるエネルギー事業(国内・海外のガス・電力事業等)を対象とし、省エネルギーの進展度合いや電源構成の推移等も考慮した複線的なシナリオ(1.5°Cシナリオ(NZE2050)、2.6°Cシナリオ(STEPS)<sup>\*</sup>)を想定し、分析を行いました。

シナリオ分析によって得られた示唆を中長期的な事業戦略の検討に生かしながら、当事業のレジリエンスを高めるための取り組みを着実に実施していきます。また、今後の世界的な気候変動対応の進展により、シナリオの前提条件が変化していく可能性があります。外部機関のシナリオを参考にしつつ、必要に応じて更新を行いながら、引き続きシナリオ分析を深めていきます。

<sup>\*</sup>出典:IEA[World Energy Outlook 2021]

### ■ 気候変動に関するガバナンス体制



- 取締役会  
取締役10人(社内取締役6人、社外取締役4人)
- ESG推進会議(経営会議)  
社長執行役員1人、副社長執行役員3人、常務執行役員7人  
<sup>\*</sup>原則年3回を「ESG推進会議」として開催
- ESG推進委員会  
副社長執行役員(ESG推進統括)、関係組織長等

(2023年6月23日時点)



### 温室効果ガス削減の取り組み

Daigasグループにとって、温室効果ガス排出削減の取り組みは極めて重要な使命であり、自らの事業活動はもとより、エネルギーをご利用いただくお客さま先でのCO<sub>2</sub>排出削減にも注力しています。「エネルギー・ランジョン2030(ET2030)」では、2030年度に国内サプライチェーンにおけるCO<sub>2</sub>排出量を2017年度比で500万トン削減することを目標に掲げており、CO<sub>2</sub>排出量削減に向けた様々な取り組みを進めています。また、「カーボンニュートラルビジョン」では、2030年度に年間約1,000万トンのCO<sub>2</sub>排出削減貢献を目指すことを経営目標の一つに掲げています。この指標は社会全体での削減に貢献できることから、当社グループの事業活動の取り組みとリンクする形で目標化してマネジメントに用いています。(各取り組みは □□ P.38-44をご覧ください)

### 脱炭素社会に向けたレジリエンスの取り組み

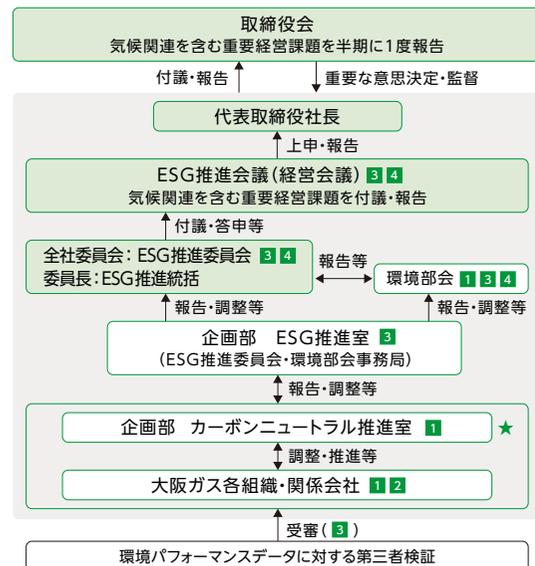
気候変動による社会全体の大きな課題の一つに、社会基盤であるエネルギーの安定確保があります。Daigasグループは、脱炭素社会に向けて、安定供給・レジリエンスの面でも社会へ貢献し続けるために、脱炭素化技術を活用したガスや電気といった複数のグリーンなエネルギーと災害対応機器やエネルギーの面的・高度利用といった様々なサービスを引き続き提供していきたいと考えています。当社グループは、事業成長と社会基盤の安定の両立を目指し、世界的に気運が高まる脱炭素化への対応として、社会全体のCO<sub>2</sub>排出削減貢献活動、ガスの高度利用の促進、脱炭素化技術の開発の取り組みを進めます。当社グループによるエネルギーの低・脱炭素化の全体像については □□ P.39をご覧ください。

## リスクの管理

Daigasグループの事業計画や投資計画の意思決定の際には、ガスおよび電力事業をはじめ各事業の担当組織が各事業に及ぼすリスク要因や影響度を分析し、リスクを抽出・識別したうえで、その他の事業リスク等と合わせて経営会議の審議を受けます。策定された計画における気候変動リスクは、「環境部会」「ESG推進委員会」「ESG推進会議(経営会議)」で報告・フォローを行い、PDCAサイクルにより管理しています。また、取締役会や経営会議において、気候関連のリスクや持続可能性について投資判断を含む意思決定を行っています。2023年3月末までに気候変動関連で付議・報告した案件には右記があります。

- カーボンニュートラルビジョンに基づいた脱炭素社会に向けた協業や参画事案への決議
- 「ET2030」の策定と開示
- 気候変動対応を管理する指標の実績フォロー など

### ■ 気候関連リスク管理体制



- 1 計画策定** \*気候変動によるリスクと機会  
環境\*に関する横断的課題への対応  
環境戦略\*立案  
各組織活動への反映
  - 2 実施・運用**  
各目標への取り組み  
各指標の実績把握
  - 3 点検**  
環境部会・ESG推進委員会・ESG推進会議(経営会議)での各目標・実績の報告・フォロー  
環境パフォーマンスデータに対する第三者検証受審
  - 4 見直し**  
課題の抽出  
対応策検討・改善
- ★ **カーボンニュートラル推進室の設置**(2022年4月)  
カーボンニュートラル化実現のための戦略立案・推進を統括各組織・関係会社との調整・計画推進・フォロー

## 指標・目標

脱炭素社会の実現に向けて、省エネルギーや天然ガスの高度利用、再生可能エネルギーの普及などによる徹底したCO<sub>2</sub>排出削減貢献を進めます。

分野	項目	目標	目標年度
グループ	グループCO <sub>2</sub> 排出量	CO <sub>2</sub> 排出量 実質ゼロ	2050年
		2,702万トン* (2017年度比 ▲500万トン)	2030年
自らの事業活動でのCO <sub>2</sub> 削減	国内電力事業の再生可能エネルギー電源比率	50%程度	2030年
	再生可能エネルギー普及貢献量	500万kW	2030年
		250万kW	2023年
お客さま先・バリューチェーンのCO <sub>2</sub> 削減	● 天然ガスや再エネ等、高効率・高付加価値の機器普及により、低・脱炭素化を推進 ● LNG船の効率的な運航、低公害車等の利用拡大 ● 高品質な、情報・不動産・材料分野の各ソリューション普及による環境価値の提供		2030年 まで毎年
社会へのCO <sub>2</sub> 削減の貢献	CO <sub>2</sub> 排出削減貢献量(トン-CO <sub>2</sub> e) (お客さま先や海外での削減貢献も含む)	1,000万トン (2016年度基準)	2030年

※ 国内サプライチェーン(スコープ1・2・3)における排出量(「ET2030」で新たに2030年度目標を設定)